

両足院蔵『江湖集秘語』覚え書

大秦 一浩

京都大学大学院文学研究科
国語学国文学専修 研修員

『江湖風月集』は、松坡宗翹が禅僧の偈頌を集めて編纂したといわれている、禅味の高い心境が発露された詩文集であり、禅僧たちの教養の源の一であった。日本で禅宗の宗門七部書のうち、『江湖風月集』は、南宋五山の公式上堂をふまえる『虚堂録』に対して、南宋末より元初に至る群賢、さほど有名ではない作者の作品であり私的な文学作品の集成であるにとらえられる。禅の偈頌は日本人にとって難しかったこともあり、熱心に研究され、講筵に供された。その研究成果は長年にわたって伝授され伝承され、抄物として現存する。諸本についてはまだ体系的な究明がなされていないが、本稿が取り上げるのはその諸本の一本、建仁寺両足院に蔵される『江湖集秘語』（以下本書と呼称）である。私はまだ本書の全貌を明らかにし得ていないが、現在気が付いたいくつかの問題点や特徴について報告しておきたい。

本書の成立を物語る、林宗二の手に成る奥書を次に掲げる。（註1）

①右、此抄出者、以東海・以天兩大和尚御聞書、所令清書也。②先是、三関居士於相州小田原、從始瑠璃灯棚頌至監裡魚頌、令抄出販洛之砌、居士不日臥病、不幾逝矣。臨終之刻命予曰、令續抄之。任遺命、從演史頌、令清書之。③二大老口義之外、不加愚意

之。一言誠可謂至宝、努々勿及外見矣。④今日、相当大祥忌備之 前重拭淚痕而已。

⑤永祿四年龍集辛酉首夏廿九宗二〔「方生」の印〕

冒頭①において、本書が東海和尚・以天和尚の聞書であることが述べられる。両和尚は、『日本仏家人名辞書』によれば、次のように記される。（註2）

東海 宗朝一四五五～一五一八〔臨濟宗〕京都大徳寺の第七十二代なり、宗朝字は東海、淡路の人、其の俗姓詳ならず、陽峯宗詔に師事して印記を受け、大徳寺に主となる、永正十五年十一月二十七日遺謁を書して曰く、全用全機、不改辛辣、大衆近前、喝虚空裂、と筆を投して寂す、壽六十四

以天 宗清 ~一五三四〔臨濟宗〕相模早雲寺の開山なり、宗清字は以天、自ら機雪と称す、京都の人なり、大徳寺の東海朝禅師に参して心印を稟け、永正の末詔により、大徳寺に住す、後柏原天皇特に勅して正宗大隆禅師の號を賜ふ、相模の太守北條氏綱金湯山早雲寺を創して師を開山となす、天文三年正月十九日寂す、壽缺く

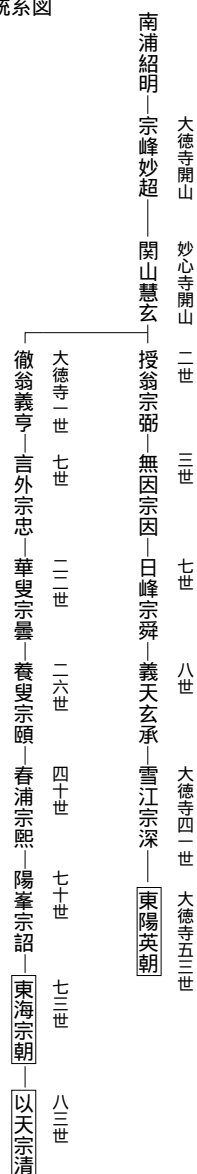
また、その法統は【図一】のようになる。（註3）

②において、本書の書写は三関居士・林宗和により始められたが、作業は宗和の死により「監裡魚頌」ま

でで中断し、宗和の遺命によって宗二が書写を引き継ぎ完成させたことを述べる。

この林宗二は、伊藤東慎氏『黄龍遺韻』に詳しく、それによれば名は逸、方生斎・安盛とも号し、法名は桂室宗二居士。建仁寺三十五世両足院開山龍山徳見の歸朝に従い来日し奈良に住んで饅頭の製造・販売を始めた林浄因の後裔持平道太の第三子である。それゆえ饅頭屋宗二とも呼ばれ、『饅頭屋本節用集』の著者に擬せられたこともあった。当代随一の学者清原宣賢の弟子であり、和学者・漢学者として著名であった。その講筵には五山僧・堂上公卿がこぞって集い聴聞したという。子の梅仙東通、孫の利峯東鋭が両足院に住したため宗二の作製・書写した抄物の多くが現存する。

【図一】東海・以天法統系図

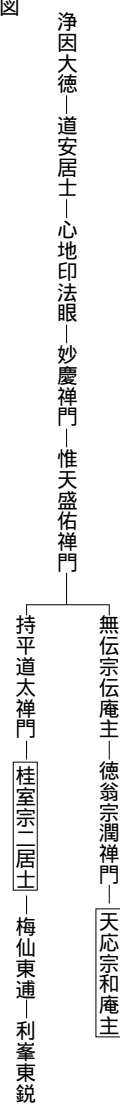


天正九（1581）年没、享年84歳。（註4）

宗和は宗二の従兄弟の子にあたり、一年の年少で、破関子・三関（斎）などと号した。法名は天応宗和庵主。永禄二（1559）年没、享年61歳。

両者はそれぞれ独自に抄物を作製したのみならず、例えば『東坡詩抄』のように、一本を二人で書写することもあった。宗和が没したためとはいえ、宗和の絶筆である本書を宗二が書き継いだのも、そうした共同書写の一つといえるだろう。両者の関係は『黄龍遺韻』に載せられる「塩瀬先祖系図」によって【図二】のようになる。（註5）

【図二】林宗二・宗和関連系図



また宗和は、本書の書写を相州小田原において始めたことが述べられる。これは、講師の一人である以天宗清が、金湯山早雲寺の開山であることと関連するものと考えられる。金湯山早雲寺は、大永元（1521）年、相模の太守北条氏綱の創建に成る。北条早雲が大徳寺四十世春浦宗熙に参禅したという結縁により、春浦の法孫として以天が開山となった。開山は東海の没後のことであり、宗和が両師の住した大徳寺にではなく、わざわざ相州小田原まで出向いている点、本書の原本である「御聞書」成立に関わって注意されるところだが今のところその事情は詳かにし得ない。

③においては、本書が、東海・以天両師の「口義」そのままを写しているといい、自分の意見を加えないという姿勢で書写を行ったことを述べる。

④では、宗二が奥書を書いた日が宗和の三周忌（死後25か月め）「大祥忌」にあたり、一字不明であるが、本書を霊前にそなえること、また宗和を追憶することばが述べられる。永禄四年の2年ほど前、永禄二年には宗和が「籃裡魚頌」までを書写したことがわかる。

最後の⑤において、書写が永禄四（1561）年に完了したことを述べ、自署し方生の印を捺す。

本書は、『新纂禅籍目録』『国書総目録』において、三冊本とされるが、現在目にするのは二冊であり、宗二筆の「演史頌」から始まる二冊分しかなく、宗和筆写部分については両足院に残っているのかどうか未調査である。土井洋一氏や伊藤東慎氏の論においても、『江湖風月集』の抄物は二冊とされている。（註6）

次に本書の特徴を、まず偈頌の目録について、諸本を対照しつつ記す。現在『江湖風月集』に関して管見に入る公刊された諸本は以下のようなものがある。写本・刊本の別を写・刊と、また影印・翻刻の別を影・翻と、に略して記す。

- ①『江湖風月集抄（守仙自筆）』写影（『龍門文庫善本叢刊』第四卷，昭和60年12月25日，勉誠社）
- ②『襟帯集』写影（柳田聖山・椎名宏雄共編，『禅学典籍叢刊』第十一卷，平成12年12月20日，臨川書店）
- ③『江湖風月集聞書』写影（壽岳章子編，『向日庵抄物集』下巻，昭和62年2月15日，清文堂）

- ④『江湖集考証』写影（同③）
- ⑤『江湖風月集訓解添足』写影（同③）
- ⑥『（新編）江湖風月集略註』刊影（同③）
- ⑦『（新編）江湖風月集略註』刊（京都大学附属図書館蔵，分類番号4 - 02 / コ / 28）
- ⑧『癸酉版江湖集鈔』刊翻（高羽五郎編，『抄物小系』7，I 昭和48年6月，II 昭和48年12月）
- ⑨『首書江湖風月集』刊影（同③）
- ⑩『蓬左文庫蔵駿河御讓本江湖風月集抄』写影（中田祝夫編，『抄物大系』，昭和52年10月25日，勉誠社）
- ⑪『江湖集鈔』写影（同②）
- ⑫『江湖集夾山抄』刊影（同③）

①から⑨までが臨済宗系諸本，⑩から⑫までが曹洞宗系諸本，とおおよそ分類している。以下主だったものを見てゆくと，①は奥書によれば，東福寺不二庵の彭叔守仙が永正十（1513）年24歳の時，師の芳卿光璘の講筵に列し謄写したものを，永正十八年と天文元・二年とに講義に用いた後で，天文二（1533）年に全部を清書し直したものである。②は，南浦文之（1555～1620）の編になるもの。④は，無著道忠（1653～1745）晩年の作。⑤は，④の無著道忠の弟子である衡梅禅悦の述作で，宝暦六（1756）年脱稿。⑥は，一般に東陽英朝の本とされるものである。東陽英朝（1429～1505）は姓土岐氏，美濃の出身。天竜寺，竜安寺など諸方に参じた後，文明十三年勅を奉じて大徳寺に住した。大徳寺五十三世である（【図一】法統系図参照）。⑦は，広く流布した⑥と同じ略註系の無刊記本で，「新編」を冠するのは尾題のみ，下巻は「蜀松坡憩蔵主」より始まり「別本増入之頌」を有し，「南堂清欲題，清拙跋，天秀道人書，東陽叟跋」で結ぶ。（註7）⑧は，⑩の西田絢子氏解題に述べられるように，萬安英種の『（新編）江湖風月集略註抄』の系統に属している。⑩は，識語を欠き著者・成立年代とも不明であるが，西田絢子氏解題によると，永禄・天正・文禄（1558～1595）ごろ，曹洞宗下野大中寺の快庵派による成立であると推定される。⑫は，編者不明，万治二（1659）年の刊行。柳田氏解題によれば，註釈にとられる「統翠」という人物は，統翠を号した江西龍派を指すのではなく，曹洞宗系の人物であるようである。

以下主として比較対照に用いるものは、刊本として『京都大学附属図書館蔵（新編）江湖風月集略註』（以下略註本と呼称）、写本として『龍門文庫蔵江湖風月集抄』（以下守仙本と呼称）と、『蓬左文庫蔵駿河御讓本江湖風月集抄』（以下御讓本と呼称）、の三本である。

本書は「演史」より始まり、「嘯雪」に終わるが、頌の始めに「」印を書き、その下に作者名を記し、次に改行して「」印を書き、その下に題を記す。その後改行して頌を掲げる。この形式は後にすすむに従い守られなくなり、作者名が題の前に置かれることはほとんど無くなって、題に対する註釈の中で法嗣などととも紹介されるようになる。まず作者名、次に題

を掲げる点では、略註本、守仙本も同じであるが、守仙本は「」「」印を附すことまで同じであり、この形式は最後まで一貫している。御讓本は、題の下に作者名を記すが、作者名と頌題のどちらにもほとんど註釈文が附されない（註釈文がある場合でも頌題に関しては題が人物の号の場合に「号」と注してあったり、作者名に関しては法嗣が添えられるくらいである）。

頌の配列は、「演史」から「嘯雪」まで、本書、略註本、守仙本、御讓本、ともに用字に若干異同のあるもののほぼ同じであるが、巻末に大きな異同がある。（註8）本書の巻末は「嘯雪」頌であるが、他三本はそこで終わらず更に偈頌がなっている。

【巻末の偈頌配列対照表】

| 略註本 | 守仙本 | 本書 | 御讓本 |
|----------|-----------|------------------|--------|
| 石霜燾和尚 | 石霜寿和尚 | （作者名未掲出） 「嘯雪」 | 石霜壽和尚 |
| 「嘯雪」 | 「嘯雪」 | | 「嘯雪」 |
| 別本増入之頌 | | | |
| 石霜燾和尚 | 四明天童東岩日和尚 | | 東岩日和尚 |
| 「血書華嚴經」 | 「送僧入浙」 | | 「送僧入浙」 |
| 東岩月和尚 | 「祖庭」 | | 「胡桃」 |
| 「送僧入浙」 | | | |
| 寂庵相和尚 | | | |
| 「鉄面」 | | | |
| 同前 | | | |
| 「郁山王」 | | | |
| 無名 | | | |
| 「守護国円明溪」 | | | |
| 同 | | | |
| 「泗州留錫南禅」 | | | |

略註本は、石霜燾和尚「嘯雪」で下巻を終えた後、「別本増入之頌」として、石霜燾和尚「血書華嚴經」、東岩月和尚「送僧入浙」、寂庵相和尚「鉄面」、同前「郁山王」、無名「寄護国円明溪」、同「泗州留錫南禅」を収めている。これに対し、御讓本は「別本増入之頌」の註記が無く、「嘯雪」の次に、東岩日和尚「送僧入浙」「胡桃」を掲げるが、この「胡桃」は、略註本、守仙本、本書においては蜀希叟曇和尚の四首目に「古

桃」という名で掲げられている（当然御讓本での該当個所にこの頌は掲載されていない）。守仙本も、「別本増入之頌」註記が無く、「嘯雪」の次に、四明天童東岩日和尚「送僧入浙」「祖庭」を収める。本書を除く三本は、「嘯雪」以降に頌を置き、そこには「送僧入浙」を共通して含んでいる。本書は「増入」されたと思われる偈頌を含まず、より古い形を残すものといえるだろう（ただし後述のように、東海・以天の時代に

は既に「送僧入浙」を増加した本があり、そういう本を東海・以天が見ていたことは知られる。

守仙本の末頌「祖庭」は、他本には掲載されていないが興味深い註記がある。

祖庭 祇陀開山大智禪師偈頌之中載之

「祖庭」を収める典拠を述べるのだが、ここに出てくる大智禪師(1290~1366)は曹洞宗の僧侶である。肥後長崎の出身で加賀獅子山祇陀寺の開山である。晩年には肥後に退き、鳳儀山に廬して聖護寺の開山となる。洞家の詩を談ずる者は先ず指を師に屈したといわれる人物である。

ここで思い出されるのは柳田聖山氏の指摘である。(註9)氏は日本における「宗門七部書」の選定を、当初五山以外の禅門で自覚したのではないかとした上で、『江湖風月集』の抄物に関わるのは中世に曹洞僧の方が多く、後に臨濟僧が関わりを深めていったと推定される。その臨濟僧である東陽英朝の本と目されている略註本は、『江湖風月集』の抄物が曹洞下より臨濟系に移行するきっかけとなる格好の根拠であるとされる。守仙本「祖庭」頌の註に曹洞僧の名が見られることは、こういった曹洞・臨濟間における交渉の一端を示すものといえるかもしれない。

一方、本書はむしろ臨濟宗の立場を強く意識しているように思われるふしがある。例えば、本書独自の註釈文の中に、

…後、大灯国師出テ一問一答テカチタマウ也 其時ヨリ禅宗ハ諸宗ノ長タル也(蜀松坡憩蔵主「題友人行卷」)

と、禅宗の他宗に対する優位性を述べたり、

曹洞宗ナントノタタミヲ和テ云ヤウナソ(自然恭和尚「焦山侍者」)

臨濟モ濟世医方ト云也(蜀松坡憩蔵主「帰江陵奔講師喪」)

下部ヤラウ主人ヤラウ見分又ハ臨濟宗ノ眼テハアルマイソ(同「開灯油田建明覚塔」)

などと、他宗と異なる宗門の立場や宗門の矜持を窺わせるようなところが散見する(引用は「老宿云」で始まる東海あるいは以天の説く部分。後述)。また、最後の「嚙雪」頌を終えた後に、次のような註記がある。

此奥ニ送僧入浙ト云頌ヲ書タル本アル也 老宿云一番ニ瑠璃灯棚ト云頌ヲ置テ

後ニ嚙雪 字ヲ置ハ一番ハ権ヲ云也 終ハ実ヲ云也 権実トハ何ヲ指テ

云ソト云処アル也

ここにいう「権実」は「権実二教」や「権実二智」などの術語にあらわれる、物のとらえ方をさし、「権」は権謀権宜の意で一時的施設を、また「実」は真実不磨の意で永く改まらないものをいう。いわば仮とまこと。従ってこれは、冒頭の「瑠璃灯棚」から末尾の「嚙雪」までの配列を、方便に始まり真実に至るというまとまりのあるものとして認めた言及であり、この把握には『江湖風月集』を単なる詩文集として見なしていない姿勢があらわれている。これは註釈するのに、後述の如く「下語」という用語を使用している所からもわかる。

本文の解釈・註釈の方法について本書の特徴を記す。「演史」頌の題とその註を諸本より掲げる。

略註本

演史 演説代代史記之事实者也。多是警人之所為也。譬如本朝歌平家者也。

御讓本

演説代々史記之事实也。多是警人所作也。譬如本朝歌イヤ平家物也云々。

守仙本

演史 演史記之心也。史記ヲ演説スル也。山谷力演雅ハ演爾雅之義也。

日本ニ平家ヲ目クラカ語ルヤウニ唐ニモ史漢ノ事ヲ語ト也。

本書

演史 史記ヲ演説スル也。山谷演雅詩八爾雅ヲノヘタソ。日本ノ平家ヲ語ル 演史ヨ。唐土ニモ史記漢書高日本ニモ座頭ノ事ヲ演史ナト、 書ソ。

略註本に「演史」とは史記を演説する者で多くは盲人がこれにあたる。たとえるなら日本で平家をうたう者のようだ、と簡潔で分かり易く説明される。御讓本も同じ内容である。これが守仙本になると、「演史」そのものの説明は同様なが、次に「山谷力演雅八演爾雅之義也」という一文が加わる。本書も守仙本にほぼ同じく「山谷演雅詩八爾雅ヲノヘタソ」とあり、虫損により読めないところがあるが、更に註釈を続けている。また「演史」に従事する者について、略註本・御讓本が簡潔に述べるところを、守仙本は「日本ニ平家ヲ目クラカ語ルヤウニ唐ニモ史漢ノ事ヲ語ト也」と述べ、本書でも「日本ニモ座頭ノ事ヲ演史ナト、 書ソ」と述べる。

さて以上につき、後者「演史」に従事する者に関する註釈は、講述者の説き方が異なるという点で、それぞれの本の個性に留意されるくらいである。しかし、前者「演史」そのものの説明にあげられた「演雅」「演雅詩」はどうか。それは、「演史」が「史記」を「演説」することをあらかずきに留意して、同類の具体例を参考に引いておくために記されたものだろう。すると、少なくとも「演史」そのものを理解するには必ずしも欠かせないものとは言えない。すなわち「演史」を説くのに「演雅」にまで言及するというようなことは、註釈が単に先学から受け継いだものを次に伝えるだけのものではなくて、学人の理解のために内容が増補されてゆくものであったという事情を窺わせる。

また、諸本に共通する註釈がさらに個別に増補されてゆくということから、講義に際しては、頌に註の附せられた本が利用されていたことも考えられる。本書は有註本を使用していた可能性が高い。例えば、江西浄蔵主「天童侍者」頌の註であるが、第二句「三應」以下の内容を解釈する中で、略註本・守仙本・御讓本の三本には見られない次のような箇所がある(傍線稿者)。

昇精魂ト八胸キニトノカウノトアツカウ義也。何
不
道将向上来トハトツクニ我前テイヒモセイテト云
義也。

文意通じ難い箇所があり、或いは誤読もあるうが、「昇精魂」「何不道将向上来」の二句は、何かからの引用かと思われるが、偈頌に該当する字句は無く、この句の唐突さにとまどわざるを得ない。或いは宗門では当たり前口をついて出る表現でもあったらうか。

これは前に「演史」頌の註について述べたように、本書の原本である「御聞書」の「口義」が有註本をもとに行われていた可能性を示すものと思われる。

この註は、本書独自のものであるが、同じ「天童侍者」の他の註については、諸本互いに共通する部分を有している。これらの共通した註は、学統上継承されてきたものだろう。本書は、このような『江湖風月集』に関するいわば一般的知見を説いた後に本書の立場で註釈しているが、それは多く「老宿云」「老宿義云」「師曰」という形で註されている。時に「或人」「古人」などのことばを引く。

老宿云第一二句達磨ノ云タル事ヲ本ニスレハ落窠窟也。(九峯昇和尚「憩庵」)

老宿義二一ノ句八釈尊ノ生死モ衆生ノ生死モ同物ヨ。(蜀松坡憩蔵主「帰江陵奔講師喪」)

師曰古人古徳八皆師家ノ下ニテ如斯アルソ。(同「玉田」)

これらは、既に註釈された偈頌の字句をさらにわかりやすい表現で解釈したり、例を補っている。この「老宿」や「師」が誰を指すのかははっきりしないが、東海宗朝もしくは以天宗清である可能性は高い(「或人」や「古人」については不明)。

その内容は、他本にもあるような、典故をふまえての語義の説明もあるが、句毎の解釈に特色がある。例えば、

(「畢竟難瞞店主翁」という句の「店主翁」に対して)

又義二八自己ノ主人公ヲ指ソ。此八何モ面白也。

(東瓠竺山和尚「雪中寄同行」)

(「平量大地満量室」という句に対して)

或人云平量^{ヒン}満量^{モン}ト唐音ニ云カ面白キ也。(雪岩欽和尚)「斗山」)

などと、字句の読み方や頌句の内容を鑑賞する「面白」という表現が散見する。また、一つの句(複数句を一括することもある)について、その内容を短い語句で言い表わすことが多い。これは守仙本にも見られるが、本書に独特なのは、それを「下語」という形で解説していることである。例えば、江西浄蔵主「天童侍者」頌の註に次のような形であられる(傍線稿者)。

第一下語、響、是八雲門一字関也。ノ事ヲ云タハ、打八ヒ、クト云義也。云源ノ事ヲ云タカ、今ノ侍者ニ響ク也。第二下語八一処不透兩処失功、第三下語児不覚、言八入草義是也。師家ノ学者ヲ接スル八婆ヲウチノ孫ヲ程ノ事也。第四下語八百花春開、西ヲカケテヨキ也。

「下語」とは叢林用語で、師家が学人のために古則公案又は頌古垂示上堂などの法語に対して下した語のこと。著語、揀語、一転語などともいう。すなわち、学人が偈頌を理解するために師家が施す(又は学人が自己の見処を述べる)解釈・註の一種である。

禅宗は不立文字といいながら、その実、大いに文字に依ってその宗旨を伝えており、祖師の語録が多数残されている。「下語」はそうした祖録にあらわれる宗門上の意義をとらえる上で重要な役割を果たしている。

もとより「下語」が註の一種である以上、『江湖風月集』の偈頌に附されておかしくはないのであるが、「下語」という形で註釈されることは、『江湖風月集』が、或いは詩文としての文学性は当然として、宗旨を学ぶ教典として、むしろ本則に附した頌古に比する程の価値が認められていたことを物語っているのではあるまいか。

本書は次のように結ばれている。

イカニ柔ニ作タリトモ知テ作タラ八頌也。不知人ハヲソロシケニ作トモ不頌也。

どんなに俗っぽいことばをならべても、悟りに達した上で作ったのなら、それは頌である。悟りに達していない人はどんなにいかめしくことばを整えたとしても、それは頌ではない、と。禅僧たちにとっては、どれほど立派な詩文であろうと宗旨を体得して詩句に悟りの心境が顕れていなければ、偈頌だとは認められなかった。逆に、作者が悟りに達し、それが顕れてさえあれば、詩句がどのようであれ、それは本当の偈頌だったのである。

禅僧たちは、詩囊をこやすためだけでなく、開悟の境致をもとめるために真摯に『江湖風月集』の研鑽に努めていたようである。

註

- 1 この林宗二の奥書は、土井洋一「宣賢講『莊子抄』の成立とその価値」(『国語国文』第二十九巻第四号)でも既に紹介されている。
- 2 『日本仏家人名辞書』では、東海宗朝に関して、師蠻撰『延宝伝灯録』卷第三十二「大徳陽峯宗韶禅師法嗣」を、また以天宗清に関して、師蠻撰『本朝高僧伝』第四十四「相州早雲寺沙門宗清伝」を、それぞれ漢文体の原文を訓み下して掲載しており、引用にあたっては、原文を仏書刊行会による活字版により検した結果、例えば「以天」を「伊天」とするなどの明らかな誤りに関しては訂正している。また皇紀は西暦に改めた。
- 3 系譜は、玉村竹二『五山禅林宗派図』(昭和60年12月15日、思文閣出版)を用い、大徳寺歴代については、相澤恵海『禅学要鑑』(明治40年6月8日、瀬川書房)を用いた。
- 4 林宗二・宗和の事蹟については、新村出「林宗二の事蹟」(『新村出全集』第九巻、昭和47年11月30日、筑摩書房)伊藤東愼『黄龍遺韻』(昭和32年11月13日、建仁寺内両足院)(特に「二、林氏系統の多い初期歴代」の「6梅仙東逋(イ)梅仙東逋とその父林宗二」に詳しい。)において詳述されている。またこれらをふまえ『日本

- 古典文学大辞典』中「林宗二」の項が大塚光信氏の手
に成り、本稿はその記述に負うところが多い。
- 5 註4, 伊藤東慎『黄龍遺韻』中「二, 5 和仲東靖と神道研究」に掲げられた「塩瀬先祖系図(3)」を用いた。
 - 6 土井洋一氏は註1を, 伊藤東慎氏は註4をそれぞれ参照。
 - 7 影印された⑥は上巻・下巻の版が異なる。下巻は匡郭双边, 字体の差は明らかで所蔵印も違う。内容としては一貫しており本文読解に支障は無いだろうが, 下巻末の刊行年は上巻に適用できない。本稿使用の⑦京大蔵本は上巻に一致すると見られる。
 - 8 偈頌配列の異同は, 略註本・守仙本・本書における, 重慶靈叟源和尚の五首のうち後半三首「古樵」「五祖栽松」「樵屋」を, 御讓本では「イ本ニアリ」として「古樵」の前に作者名を掲出し, 蜀希叟曇和尚の作としていることと, 本文に後述する「古桃」の位置くらいである。実際には作者・偈頌の配列に関してもっと多くの異同があるが, それは「演史」以前に見られ, 本書に掲載される「演史」から「啗雪」までの範囲ではほとんど異同が無い。
 - 9 『禅学典籍叢刊』第十一卷柳田聖山氏解題による。

(領域横断的研究・日中韓版本研究班班員)

